

§ 論文批評 §

生徒氏名 〇〇〇〇

課題名 小論文 第7回

《概評》

* 考察力	<input type="checkbox"/> A	B	C	D
* 表現力	<input type="checkbox"/> A	B	C	D
* 構成力	<input type="checkbox"/> A	B	C	D
* 論旨の明確性	A	<input type="checkbox"/> B	C	D

《総合評価》 A B C D

《講評》

今回の小論文は、人と人の繋がりや、意図を超えて、目に見えない力が働いているように感じるという思いを、体験に照合して述べたこととなりますね。それ自体は、まあよいかとも思いますが。課題文とは論点が違うようですので、その点が気になります。

① まず、課題文を読んで、それについて自分の考えを述べるという出題だった場合、課題文の要約を簡単しておく必要があると思います。〇〇さんは、冒頭そうしているのですが、できれば、それ（書いてあることが〇〇さんの考えではなくて、課題文の要約だということ）がはじめから読み手にわかるように書くべきです。つまり、書きだしに次のような工夫が必要です。

課題文は次のようなことを述べている。縁という観念は、・・・・・・・・
・・・・・・・・だといえる。以上が課題文の要点である。

② つぎに一読して、へんな感じがしたのは「私は縁というものを、何か見えない力で人と人をつなぐ役割を果たしているものだと思う。つまり筆者と同じ見解である。」という箇所です。

（縁は）「何か見えない力で人と人をつなぐ役割を果たしている」というのは〇〇さんの受けとめ方です。課題文の筆者は（縁は）「外部空間と内部空間の交わる場所で、人と人をつなぐ役割を果たしている」という主張のように思います。課題文は、何か見えない力が、とは言っていないでしょう？ うっかり、私も同じ見解であると言いながら、この後に書いてある体験談は、目に見えない力を強調しているみたいです。それならそれでいいから、

「つまり筆者と同じ見解である。」と書かないほうがよいと思います。えっ、どこが同じなのだろうという感想が読み手に残ってしまいます。

③ 今回、ご自分の体験を引き合いに出して、「縁」というものについての考えを述べるスタイルを選んだのだと思います。

読み手にわかるように書くことを大切にしたいのですが、読み手として言わせてもらおうと、「中学生の時に・・・退学になってしまった」という述べ方が、少しどういう意味なのか（高校に進学できたということは、中学は卒業できたのではないか？ということと、矛盾を感じて、どういうことかと考えてしまい、注意がそがれてしまいました。）もしかすると、「中学生の時に、学校の方針と合わず中高一貫校だったのに、私は高校に受け入れてもらえず、他の高校に進学することになった。」ということなら、そう書いてほしいところです。

④ ○○さんが、人と人をつなげるものとして、縁の<目に見えない力>を強調しようとしているのは、意図して選んだ通りではない人と人の繋がりを評価していることにあると思います。それはそれでいいと思います。

⑤ 一方、課題文の著者の「外部空間と内部空間の交わるところで、人と人をつなぐ役割を果たしている」という主張を重視するならば、それ（共通性）について論じるべきだということになるでしょう。現代社会は日常の人と人の交流における隣近所の地域性が失われがちであるが、縁すなわち共通性を共有できる相手に出会い、連携してゆくことは、生き方としても大切である、などの方向もありますね。

〇〇〇〇さんの答案

縁という観念は、日本の人間関係を考えていくにあたって非常に大切な観念の一つである。この観念は西洋の社会科学には絶対出てこないが、日本社会を考える時には素通りできない。縁とは外部空間と内部空間の交わるところ、集合論でいうと共通集合みたいな部分であるといって差し支えない。これはすなわち、人間は自分のまわりに一つの心理空間ないし精神空間をもって動き回り、もう一人の人間の精神空間と重なり合うことを意味する。よって人と人をつなげているのは縁だといえる。以上が筆者の主張である。

私は縁というものを、何か見えない力で人と人をつなぐ役割を果たしているものだと思う。つまり筆者と同じ見解である。

中学生の時に、学校の方針と合わず私は退学になってしまった。中高一貫校だった為に衝撃的な出来事だった。中学一年の時に担任からラグビーを進められて三年間続けてきたので、高校に入学するとすぐにラグビー部に入部した。クラスにもラグビー部に入部した人が数人いたこともあり、私たちはすぐに仲良くなった。やがてクラスにグループが始め、グループ同士で繋がったりもした。クラブが厳しかったために、中学の時には希薄だった上下関係もしっかり学んだ。恥ずかしながら目上の人を敬う大切さを、ここでようやく身に付けることができたと思う。中学を退学にならずに、そのままエスカレーター方式で高校に進学していたとすれば、恐らく自分は人間的にもまったく成長しないままだったか

もしれない。また、様々な人と出会い「こんな考え方をする人もいるんだなー」と自分の見解の狭さにも気づかされた。

中学を退学になってしまったことは初めは信じられないことでひどく悲しんだが、現在から振り返ってみれば、自分はその高校と縁の力で引き寄せられたのだと思う。もしくは、その高校に入学してくる誰かとの間で縁の力が働いたのかもしれない。縁の力が働いた結果が良い方向・悪い方向のどちらに働いたとしても、人と人を繋げるのは筆者同様に縁だと思う。

次の解答例などは、参考になります。 共通性でつながる＝排他性について？

初月論文 No.7 模解

次の文章を読み、人と人との出会い、ふれあい・・・

日本の人間関係は縁を契機に形成される。すなわち自己と他者の共通項を見つけ出し、そこから人と人との出会い、ふれあいが生じる。共通項の存在は自他の同質性を示唆しており、それ自体円満関係の形成は、一方で排他的な人間関係をも生み出す可能性があることを看過してはならない。すなわち、共通項がなかった場合、人間関係はどうなるか、という問題である。このような場合、他者を認めることができず、排他的な反応を示すことがしばしばみうけられる。

私は現在日本法制史を専攻しているが、その名の通り、日本史と法学の双方にまたがる分野である。だが両者は研究方法が全く異なっており、名目上の共通性とは裏腹に実質的にはほとんど接点がない。そこで私のような法学系で日本法制史を勉強しているものが歴史系の研究会に出席した場合、その反応は概して冷やかである。私の発言に対して必ず寄せられる言葉の一つに「お前は法律系だから」というものがある。その意味が「歴史系と法律系は違う（更に言えば、だから法律系が歴史系に関与すべきではない、という意味もあるように思える）」ということを指しているのは間違いない。このように共通項が見出せない場合、他者を受け入れようとしない態度は決してまれなケースではあるまい。

このように共通項のみに依存した人間関係の形成には重大な欠陥が潜んでいるのである。そこで他人との出会い、ふれあいをより実り豊かなものにするため、他の方法が模索されなければならない。

これについて私は自己と他者は本質的に異なる、ということを実感することから出発すべきだと考える。各人の自我はそれぞれ異なる経験、性格、考え方などを通して形成されてきた。それゆえ各人に自我が異なったものであることもまた当然である。すなわち、自我は他者がまねることができない、この世に唯一つあるもの、という意味で世界最高のものである。これは自分だけでなく他者の自我にもあてはまる。

このように自己と他者の関係はまずもって最高の自我の並存状態の中にあることを認識しなければならない。すなわち自己の価値を認めるのと同様に他者の価値をも認めることから、より良い人間関係が形成されると考える。